

## 学生に授業に

## 興味を持ってもらうには

### ―教歴1年目の反省と課題―

山田 春菜

拓殖大学政経学部経済学科助教

#### はじめに

経済学部生だからと言って、経済学に興味があるとは限らない――経済学の先生ならこんな言葉に実感を持つであろう。他の学部と比べて、経済学部は経済学という学問に興味を持って進学してきた学生が少なくと感じる。「なんとなく、就職に有利そうだから」「潰しが利きそうだから」そんな理由で進学してくる学生が多い。

そんな「経済学に興味のない」学生に、どうやって興味を持ってもらうか。本稿では、いかにして学生の興味をひき、学習のモチベーションを保ってもらうかについて、自身のこれまでの反省と今後の課題を記す。具体的には、1年生向けの必修科目である「マクロ経済学Ⅰ」

の講義経験を通じて得た反省点や課題などを取り上げる。

この科目はマクロ経済学という学問の基礎知識を教授する講義であり、受講生は100名程度、9割以上が経済学の知識を持たない1年生だ。ちなみに、マクロ経済学は国や世界全体の意思決定を扱う分野である。GDPや財政・金融政策など、ニュースで見聞きするトピックとの関わりも多い一方で、学生の身の回りの生活から乖離した印象を抱きやすく、親しみにくい科目でもある。

筆者は昨年4月より拓殖大学政経学部経済学科助教に着任した。それまでは一橋大学大学院博士課程に在籍していたが、教育経験はティーチング・アシスタントのみで非常勤講師の経験もなかった。そのため、昨年1年間は学生に「教える」ことの困難さと奥深さに右往左往する日々であった。依然として筆者は教育歴2年目、雛のような教員であるが、少しでもはじめて教壇に立つ方々の参考となれば幸いである。

昨年1年間の反省を踏まえ、筆者なりに「学生の興味をひくために必要な3つの要素」というものを考えた。その3つとは、「わかりやすい授業展開」「学習の意義づけや魅力を伝える」「学生の参加感を高める」である。

## 1. わかりやすい授業展開

はじめて教員として学生と接し、最初に発見したことは「学生は『わからない』と思うと容易に匙<sup>さし</sup>を投げる」ということだ。わからないことに粘り強く挑戦するのが生業の研究者と違い、学生は疑問点にぶつかると考えることをやめ、授業への集中度も低下してしまいがちだ。大学によって差があるかもしれないが、少なくとも本学の学生はこのような傾向にあるようだ。つまり、学生の興味をひくためには、まずわかりやすい授業を心がけることが肝要なのである。

そのためには、そもそも「学生の疑問点」を教員が理解している必要がある。昨年の私はそれができていなかった。「これくらいわかるだろう」と安易に考えていたが、前期の期末試験の悲惨な結果に、愕然とした。学生は想像以上に、初歩的なところでつまづいている。

前期の失敗を踏まえ、後期からは学生とより積極的にコミュニケーションを図ることにした。そのために活用したのが授業支援システムにある「掲示板」機能だ。学生が自由に質問や感想を投稿できるもので、匿名での投稿も可能である。この掲示板に、授業中に設けている3

分間休憩や授業後のタイミングで質問などを投稿してもらい、授業内で回答することにした。

掲示板には、毎回3〜5通ほどの質問や感想が寄せられた。100名程度の受講生に対して十分なコミュニケーションが図れたとは言えないかもしれないが、それでも筆者にとっては大きな収穫が得られた。思ってもみないところで学生が理解につまづいていること、そして学生間で理解度に大きな差があることがわかった。

以上の経験から、月並みではあるが、今後はより一層講義において丁寧な説明を心がけたい。本学は入試で数学を課していないため、中学校・高校レベルの数学が怪しい学生が多い。高校までの知識を前提とせず、適宜復習を入れながら丁寧に説明したい。また、引き続き学生と積極的にコミュニケーションを図り、学生の理解度を確かめたい。本年度は掲示板に加えてリアクションペーパーも導入し、学生と密な関係を築いていこうと考えている。

## 2. 学習の意義づけや魅力を伝える

冒頭で記した通り、マクロ経済学という科目は学生に

とって親しみにくく、学習の意義が見えなくなりがちだ。昨年度の反省として、もっと授業全体で学問の魅力を伝えられるように工夫すべきだったということが挙げられる。初回授業でマクロ経済学の意義や魅力を伝えていたが、それだけでは不十分だったと感じた。

マクロ経済学のわかりやすい魅力としては、様々なニュースの内容を理解できるようになることが挙げられる。今後は、具体的なニュースの内容などの事例を適宜盛り込み、学生が具体的なイメージを持って学習できるように努めたい。

また学問的な魅力として、特に理論的な議論では、複雑な経済現象をシンプルに捉え、経済変数間の関係を明らかにできる点が挙げられる。理論には、ときに思わぬ関係や結論を明らかにできる面白さがある。しかし、経済学の理論を学ぶには数式を扱わねばならない場合が多く、学生には非常にとっつきにくい。理論の面白さを学生に伝えるには、地道に身近な例から少しずつ学び始めて、難解な議論に慣れてもらう必要があると考える。

これについてはちょっととした成功例がある。後期の「マクロ経済学Ⅱ」の講義で「最低賃金制度は雇用を守る

か」という点を、理論モデルを用いて説明した時のことだ。数式やグラフを多用するため、できる限り丁寧に、複雑なところは繰り返し説明するよう試みた。すると、前述の掲示板に学生から「思ってもみなかった結論が得られて面白い!」とコメントがついた。難解な議論を理解し、理論の面白さに触れてくれたと信じている(ちなみにこの理論モデルでの帰結は「最低賃金制度がある場合とな 경우에는、前者の方が雇用されている人の賃金水準は高くなるが、失業者は増える」というものである)。

### 3. 学生の参加感を高める

基礎知識を教授する科目は、教員が一方的に学生に話す講義スタイルが取られることが多いだろう。しかし、あまりに教員が一方的に話しすぎていては、学生の集中力も落ちてしまう。実際、筆者の講義でも、回を重ねるごとに受講者数が減っていき、教室にいても居眠りやスマートフォンをいじる学生が増えていった。

学生を授業に引き込み、参加感を高めるにはどうすればよいか。こうした点を考える上で非常に参考になったのが、佐藤浩章編著(2017)『講義法(シリーズ大学

の教授法2』(玉川大学出版部)だ。この本には、「マクロ経済学Ⅰ」のような大人数科目でも実践できるアクティブ・ラーニングの例も掲載されている。

今後実践したいと思ったものが、受講生に質問を投げかけ、近くに座る人と2人1組で話し合いをさせる取り組みだ。そうすることで、学生の眠気も吹き飛ぶだろう。さらに「マクロ経済学Ⅰ」は1年生向けの科目というところもあり、学生の友人づくりに一役買うことができるかもしれない。私も話し合いの時間中に教室内を一周して学生らに話しかけ、指名した何人かには回答してもらうなどして、授業への参加感をさらに高めたい。

また興味深かったものとして、学生の「同期行動」を促すというものがある。具体的には、発言した学生に対して受講生皆で拍手することが挙げられる。授業への参加感を高めるものとして有効なのだろう。『講義法』には他にも数多の工夫が紹介されている。興味を持たれた方には是非一読をおすすめしたい。

## おわりに

本稿で記したものの以外にも、大小様々な課題がある。

例えば、学習方法、それ以前に自分の不明点がわかっていない学生への対応だ。学生間の理解度の大きな差にどう対処するかという課題もある。実社会で直接的に役立つ学びを重視し、求める学生や世の中に対して「筆者は何をどう教えるべきか」といった問いもある。これらは、学問、そして大学教育の根本に関わる大切なものだ。筆者だけでなく、所属や分野を問わず、様々な経験を持つ先生方の知見も拝聴しつつ、今後もこうした様々な課題に果敢に取り組んでいきたい。

フェリス女学院大学グローバル教養学部 ・ 小檜山 ルイ「学長」

# 自分らしく輝くことが、誰かの力になる

## はじめに

フェリス女学院大学は、2025年4月より、グローバル社会を軽やかに生きることのできる知識と知恵とスキルを備えた女性を輩出すべく、「グローバル教養学部」を新設した。従来の文学部、国際交流学部、音楽学部を1学部に発展的に再編し、3学科9専攻体制を展開する。「国際社会学科」には、〈国際関係専攻〉〈地球社会・環境専攻〉〈国際ビジネス・観光専攻〉があり、「心理コミュニケーション学科」には、〈心理専攻〉〈メディア専攻〉〈共生コミュニケーション専攻〉がある。「文化表現学科」には、〈ヨーロッパ・アメリカ専攻〉〈日本・アジア専攻〉〈音楽・身体表現専攻〉が設置されている。

## 1 カリキュラム概要

1、2年生では、導入ゼミ、基礎ゼミ、英語、初習外国語、アカデミック・ライティング入門、情報リテラシー基礎、キリスト教概論、キリスト教学が必修科目となっており、語学、情報、学術的技法の基礎の習得を学生全員に求めている。ただし、語学には5コースを用意し、学生個人の意欲に応じた選択を可能にしている。インテンシブ・コースは、週に5〜6コマの語学の授業を用意しているが、他にスタンダード・コースや2か国語履修コースも選択可能である。必修以外では、学科を横断する科目群（CLAコア科目）から、学生一人一人の関心に従って選択的に16単位取得する。幅広い学び、実践的で主体性が育つような学びを用意している。

その上で、3年生になる時に、専攻と3、4年生を通じて参加し、卒論指導を受ける専門ゼミを決定する。同

時に3年生からは、よりフォーカスを狭めた専門科目を取得していく。

## 2 カリキュラムの特徴

まず、1学部にすることで、学科・専攻間の垣根を一層低くした。各学生が、自分の関心と適性にできるだけ沿った形で大学での学びを組み立てられることを重視し



[写真1]留学生対象科目「日本事情」授業風景

ている。選択の自由の幅を拡大し、オーダーメイドの教育を目指す。その狙いは、多様な特性と関心を持つ学生一人一人が、大学での学びを通じて、自信と自尊心を養うことである。それが、社会に出て行く基盤になると考えている。

第二に、第一の特徴を支えるために、全学年で少人数ゼミを展開する。少人数の環境で発表、討議、PBLの経験を繰り返し、失敗や成功を積み重ね、自分の関心、長所、短所を見極めていく。また、学生が選択に迷った際、教職員がアドバイスできる体制を整えている。2025年度から「フェリスカルテ」を学生一人一人に用意し、大学での学びの目標や関心の変化を各学年の開始時に記録し、ゼミ担当者（アドバイザー）が確認し、コメントする制度を始めた。

第三の特徴は、これまでの3学部がやや高踏的な学問に偏りがちであったことを修正し、各学科に一つずつ、明確に実学とキャリアを意識した専攻を配置したことである。国際ビジネス・観光専攻、共生コミュニケーション専攻、音楽・身体表現専攻がそれに当たる。これに伴い、実務家教員を増やし、学外の自治体、企業等との連携を

強化しつつ、PBLタイプの授業を展開している。国際ビジネス・観光専攻は容易に想像がつくであろうが、共生コミュニケーション専攻は非常に新しい試みである。神奈川県でも増えている、そして今後さらに増えるであろう、外国人のコミュニティと日本人のコミュニティをつなぐ仕事ができる人を育てる。具体的には地方公務員、日本語教員、NPO職員を想定している。音楽・身体表現専攻では、従来の演奏技能の習得だけでなく、作曲も視野に入れ、ホールの運営、音楽をはじめとするイベントの企画、演奏家のマネージメントなど、広く音楽およびエンタテインメント・ビジネスを担う人を養成する。

キャリアを意識した教育展開の中で、資格取得の強化は当然視野に入れるべき課題である。グローバル教養学部では、従来からある各種教育職員免許状、認定心理士、公認心理師（大学で取得すべき単位の充足）、社会調査士の資格に加え、日本語教員の国家認定資格を目指す課程を準備した。本学は、登録日本語教員養成機関として認められている。

新しい実務志向の専攻から刺激を受けて、他の専攻も学生たちの生涯のキャリアを意識した教育展開―例えば

PBLの一層の強化等―を行っていくことを期待している。そして、女性も生涯にわたり働く時代の要請に合った、リベラル・アーツの実現を目指す。

第四の特徴は、副専攻の設置による複眼的な学びの実現である。これは2023年度から取り組んできたことである。「ジェンダーとキャリア」、「データサイエンス」、「デザインと表現」に、2025年度からは「音楽」の副専攻も加わった。たとえば、データサイエンスを副専攻とすれば、大好きな源氏物語を専攻しながら、この技能の習得を目指す。あるいは、国際社会学科国際関係専攻で学ぶ学生が、音楽を副専攻として活動の幅を異次元の分野で広げることができる。

最後の特徴として、グローバル教養学部には、全学に音楽を学ぶ機会がある点を挙げたい。音楽学部にあった学びは、心理コミュニケーション学科メディア専攻と文化表現学科音楽・身体表現専攻として、グローバル教養学部の中に取り込んでいる。音楽副専攻を他専攻の学生にも提供していることはすでに紹介したが、パフォーミング・アーツ（PA科目）という演奏や創作を学ぶ科目が学科を横断する科目群の中にある。誰でも履修でき、卒業

要件単位に算入することができる。趣味として音楽を学ぶ人からプロの演奏家を目指す人まで、技能に応じた訓練を受けることができる。グローバル教養学部は、実学とキャリアに注力しつつ、グローバルな社会でのコミュニケーション能力を高める趣味、特技を大切にし、学生が豊かな人生を構築できるよう支援する。本学には専門性にこだわらない、「開かれた音楽」がある。

### 3 学びの場を広げる試み

その他、本学は、小規模ながら、できる限り多様な学びの機会を学生に提供する努力をしている。2023年に「ジェンダースタディーズセンター」（通称Gem）を開設した。本学にはすでに多くのジェンダー関連の授業があるが、学長としては、今後、女子大学ならではのリベラル・アーツの在り方を示していきたいと考えている。まずは、女性を中心にした学問体系で作るCLAコア科目の開設で、Gemがこの試みの一端を担う予定である。また、他大学との連携による単位互換や共同企画も精力的に推し進めている。従来から横浜市内12大学間の単

位互換協定に参加していたが、これに加えて横浜国立大学、女子美術大学、明治学院大学とは包括連携協定を結び、より積極的な協力関係を構築する。2024年に本学の学生が行った「生理の歴史」の展示の刺激を受け、2025年4月に横浜国立大学でも生理を巡る展示が行われた。連携を通じ、女子大学の関心を共学の国立大学に共有してもらうことができた。2025年4月から明治学院大学提供の公務員試験対策講座を、本学学生も申し込むことができるようになった。女子美術大学とは、今後芸術の分野での協働ができれば、と考えている。なお、グローバル教養学部開設とともに、他大学との単位互換制度では、男子学生も本学に受け入れることとした。さらに、地方大学とも連携を進め、学生の日本国内「留学」を拡充する。従来からある同志社女子大学との交換留学に加え、沖縄、仙台、福岡等の大学との交換留学計画が進行中である。横浜と地方との双方向の人的交流により、グローバル教養学部における学びは、一層幅広いものになる。

むろん、海外留学先の拡充も進めている。現在、南インドにある複数の大学との連携協定締結と交流事業を進め

ているところである。もともと本学は、小規模大学にもかかわらず、多くの海外の大学と提携しているが、今後は、主にアジアの諸大学との連携を推進し、学生の留学先、研修先を増やしたいと考えている。特にインドでは英語を用いた高等教育が高いレベルで行われているので、大変有望な連携先だと考えている。

#### 4 輝く、輝かせる

グローバル教養学部開設に当たり、大学全体としての特徴はどこにあるのか、どのような女性を育てたいのか、より明確に言語化する作業も進めてきた。これらの点について、学内の共通理解を深め、アイデンティティをはっきりさせ、進むべき方向を定める作業である。

本学が輩出しようとしているのは、へ自らが活きる舞台を見つけ、表現のよろこびを育み、周囲を生き活きさせる女性である。自分の価値を認め、可能性を信じられる女性。それを土台に他者の心に寄り添い、その背中をそっと押す力を持てる女性を育てていく。自分らしく輝くことが、誰かの力になる―本学から巣立っていくのは

そういう女性である。

そのために、本学は3つの舞台を用意する。①安心して挑戦・失敗できる舞台…少人数制の明るく自由な雰囲気での授業やゼミの中で、教員や仲間とじっくり対話を重ねて、自己表現をすることができる環境を提供し、学生が自分の可能性を大きく広げていくことを期する。②異なる文化とつながる横浜の舞台…本学は、海外との交流を担ってきた横浜という開かれた港町で155年にわたって女子教育を担ってきた。この町の特性を背景に、学生たちは語学力を磨きながら国内外の幅広い提携大学や留学ネットワークを活用し、多様な文化に触れ、異なる価値観を吸収する。③社会で活きる実践の舞台…本学は、主に横浜地域の企業や行政・組織と連携した共同プロジェクトやPBL（課題解決型学習）を積極的に展開している。また、音楽などの芸術的な手法を取り入れた実践的な授業、インターンや起業などの学外活動を通じて、自分の想いやアイデアを的確に言語化し、創造力と伝える力を高めていく教育を展開する。

以上のような大枠の指針を基に、今後さらなるカリキュラムの充実、さまざまな施策の展開を図っていく。



[写真2] 緑園キャンパスCLA棟渡り廊下にて(小檜山)

## おわりに

グローバル教養学部は、その学科、専攻の編成を社会状況に応じて変える機敏性を特徴とする予定である。3学部体制を1学部にした最大の理由は、意思決定がしやすい、小回りが利くという点である。全体を見渡ししながら、学科において学部には劣らない内容を展開することが可能である。それでいて、大学全体の改革のハードルが低いので、小規模大学には大きなメリットだと考えている。